

XV. 鍵盤音楽

(表 1 5)

A. ピアノ

1. 手記号の使用法

表 1 5 A の記号

⠠⠠	右手記号
⠠⠠	左手記号
⠠⠠	伴奏付きのソロパート (訳注: 1 6 - 1 9 参照)
⠠⠠⠠	音程を上を読んでいく右手記号
⠠⠠⠠	音程を下を読んでいく左手記号

1 5 - 1

第 1 5 章の記号は、ピアノ、およびチェンバロやクラヴィコードのような鍵盤楽器の為の楽譜に適用される。また、鍵盤の付いた電子楽器にも適用される。

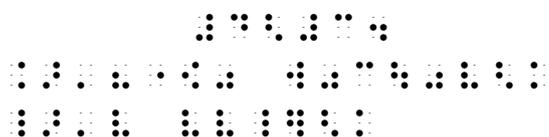
1 5 - 2

手記号やパート記号は、楽句の最初の記号の前に置かれる。

1 5 - 3

次に続く記号に 1・2・3 の点のいずれかがあれば、手記号やパート記号の後に 3 の点を記さなければならない。

例 1 5 - 3



1 5 - 4

表 1 5 A の記号に続く最初の音には、音列記号が必要である。

1 5 - 5

鍵盤楽器の伴奏がソロパートと重複していたり、アウトラインを含んでいる時は、前置符 $\cdot \cdot \cdot$ を使用する。

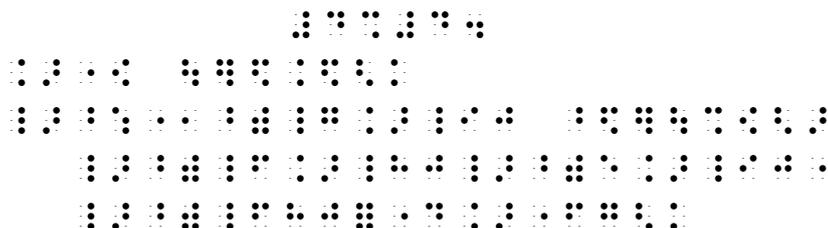
1 5 - 6

伴奏部分や鍵盤楽器でのオーケストラ縮小部分に、楽器編成についての注釈が付いているならば、墨字と同じように点訳する。

1 5 - 7

途中で手が替わる楽句は、可能な限り片手のパートに記すべきである。このような楽句は、どちらの手にすればよいかを決めるのは簡単ではないが、楽譜のレイアウトが決める手助けになる。

例 1 5 - 7



1 5 - 8

曲全体が両手に分けられた楽句でできている時は、例 1 5 - 1 1 のように片手のパートに記す。

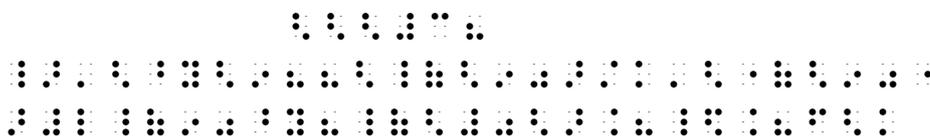
1 5 - 9

手の交替が全く同じようにパターン化して続くならば、“sim” という省略形を付け加えてよい。付け加えた省略形には、 $\cdot \cdot \cdot \cdot \cdot$ のように、5 の点を頭に記さなければならない。

1 5 - 1 0

一つのパート内で音部記号が変わっても、そのパート内では音程を読む方向は変わらない。

例 1 5 - 1 0

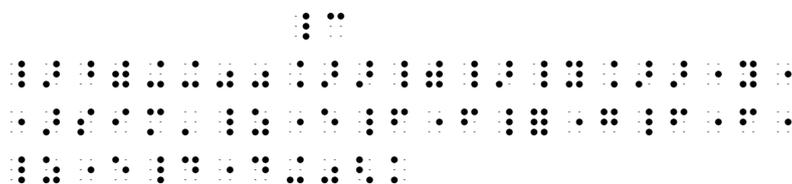


1 5 - 1 1

音程を読む方向を変えたい時は、左手のパートの音程を上から読んだり、右手のパートの音程を下から読むように指示する手記号を使う。

例 1 2 - 3 3 から例 1 2 - 3 5 は、理論のテキストで使われているこれらの手記号を示している。また、下の例は、ピアノの長いパッセージの一部にある右手記号の使い方を示している。

例 1 5 - 1 1



1 5 - 1 2

部分けを必要とする音がある場合には、これらの音がどちらの手で弾かれるのかを、はっきり示すように注意すべきである。

例 15-12

15-13

ショパンやその他の作曲家の華麗な音楽では、同時に演奏する音を表す記号 ::: を、それぞれのパートに必要とすることがある。

例 15-13

(a) (バー・オーバー・バーで)

(b) (セクション・バイ・セクションで)



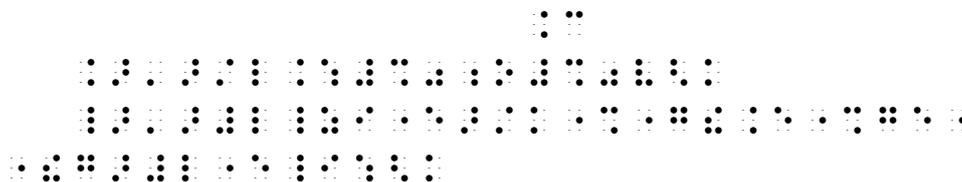
表 2 の記号

- ⋮⋮⋮ 左手で弾くト音記号譜表
- ⋮⋮⋮ 右手で弾くヘ音記号譜表

1 5 - 1 4

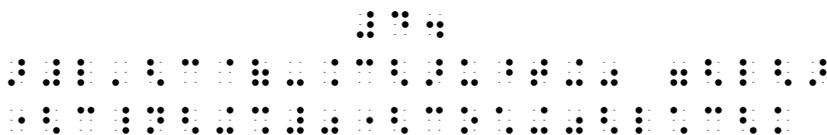
晴眼者の生徒を教える視覚障害の先生用に音部記号が点訳される場合には、墨字において片手のパートが別の譜表に移っている事を示すために、特別な音部記号が使われる。音程や部分けを読んだり使用する方向は、これらの音部記号によっては影響されない。

例 1 5 - 1 4



墨字で書かれた場所を明確にしている。

例 1 5 - 2 1



1 5 - 2 2

直ちにペダルを上げる記号は、一つの音が鳴っている間中ペダルが残ってはならないという視覚的な手がかりがある場合に使われる。例 1 5 - 2 2 は四分の三拍子である。初めの小節では、星印が左手のミのシャープの真下に置かれて、ペダルをすぐに離すという事を示している。次の小節では、星印は第 1 拍のわずかだが後に書かれているので、点字では普通のペダルを離す記号が使われている。

例 1 5 - 2 2

